

唐代小説研究

—その五—

承前

第五章 道教的人生観と社会背景

—枕中記と南柯太守伝—

第一節 枕中記・南柯太守伝に見える人生観

この兩篇は唐代の人々のもつ一般的な人生観を見据えた作品である。ここには彼等の宗教的思想と現実の人生に対する見方が内包されている。枕中記の方ができたのが早かったが、この作の主人公盧生の夢を見る前の人生観は「士として生れてきたからは、功をたて、名を挙げ、出でては將軍、入りては宰相となり、様々な珍味を食べ、すばらしい音楽を聞き、一族は繁榮し、家は益々豊かになるということこそ、人生の目的に叶うというべきだ」であり、又「私に當つて學問を志し、様々な學芸を身につけた。若い頃は、青紫（高官）の位もたやすく手に入ると考えていた。今すでに壯年に達したのに、まだ田舎で農業をしているがまだ、やり切れない話」とも言う。これらの表現は彼の人生への欲求及び、最大限の願望であり、きわめて現実的な個人主義思想である。「出でては將軍、入りては宰相」「一族の榮えは家の富」という言い方の中に、當時の一般の人々の生きる努力の目標を的確に見出すことができるのである。か

くして、彼は一つの夢を見た。夢の中で彼のすべての願望は實現したのである。第一は結婚である。天下で最高の家柄である清河の崔氏の娘を娶った。第二は進士に合格、官職の問題は解決した。第三は辺境で功績を立て、將軍になる希望を満たした。第四に同中書門下平章事となり、宰相の夢も實現した。人としてのすべての欲望が満たされると、今度は後のことが氣になつてくる。五人の息子は皆大官となり、孫も十人以上あり、死にぎわになつて、皇帝のおほめの詔をいただき、その功は天下にのこされ、その一生は、十二分に満ち足りて、やすらかに死をとげた。一生の途中には幾度かの挫折もあつたが、運よくのり切つて、人生の小波瀾にとどめた。これはまさしく、中國民族特有の樂觀的的人生観であると言ふべきだろう。魏晉以前にあつては、この欲望の満足以外に、もつとその状態を保持させ、永遠に持続させたいと願う人々があつた。そこから神仙や方士の仙薬を服み、丹を練ることが行われ、帝王も、秦の始皇帝、漢の武帝の如く、それを強く望んだのである。しかし仏教が中國に渡つて来て「だしぬけの一発」をくらわせることになつた。その一発とは「空」ということであつた。一切はすべて「空」である。だからこの盧生は人生を一場の美夢を見終え、目醒めれば、身は宿屋にあり、呂翁はその旁に坐つていて、宿の主人の炊く黍は未だ炊き上つていず、まわりの物はすべて以前のままであつたので、「ああ

劉 開 著
西岡晴彦 訳

夢だったのか」と叫ぶのである。翁は彼にむかって「人生の楽しみとはこんなものさ」と言う。彼は撫然としていたが、しばらくして、結論を下した。「名誉と恥辱の過程、榮達と没落の運命、成切と失敗の理、死と生の実相、すべてわかりました。先生はこれだけで私の欲をおさえて下さいました。恐れ入りました。」かくて彼は一切を「空」と見なし、心に抱いていたすべての欲求と願望をすてさり、頭を下げて去ってゆく。

こんどは、南柯太守伝を読んでみよう、この作品の主題と大意は枕中記と同じようなものだ。主人公の淳于棼は、夢の中で槐安國へ行き、「蟻の穴」に入つてゆく、まず公主を娶り、南柯太守に任ぜられ、食邑を領し、爵位を賜わり、宰相の地位に二十年もいて、五男二女を生み、「男は父の威光で官職を得、娘も王族から婿をとった」。しばらくして公主は死に、子供たちはのこされ、自分も國へ帰されることとなった。……目が醒めてみると、ただ「下男が庭を掃いており、二人の客が、縁台で足を洗っている。日はまだ西の桓根のむこうに暮れのこり、東の塀ぎわには樽に飲みこしの酒が湛えられていた」彼は醒めたのち「人の世のはかなさを悟り、心を道教にかたむけ、酒色をふつりと絶つた」作者はまた最後の結論で、いましめて言う。「この世に比べるもののない高位を得、國都をも動かす権勢を誇ろうとも、悟達の人の目から見れば、蟻の社会の営みと、異るところはないのだ」彼は自ら「達人」と称し、富貴を追い求め、現実の人生に執着する人々を蟻の営みと看なし、人生を単に「空」と考えるだけでなく、軽蔑し諷刺しているのである。

この二篇の小説に盛られた人生哲学は、家をおこすためには「結婚」が大切であり、身をたてるには「官途につくこと」が大切だとするものである。そして目的を達することができなかった場合は、

「空」とか「消極的逃避」でもって自らをごまかし、自らを社会と隔絶させて「拱手旁觀」の態度をとる。このような人生觀及び現実への対し方は、長いこと中国社会を捉えてきたし、現在に到っても一部の人々に擁護され、信じられているのである。この人生觀の評價にはここでは触れない。ただこのような氣風はどうして出来上ったか？この二つの作品に、濃厚な道教的色彩があることは疑問の余地はないが、その思想は魏晉の頃の自然主義的な道教思想ともちがっている。まずここで、竹林の七賢の一人、阮籍の生活と照して考えてみよう。(晉書四九阮籍伝)には「晉の文帝ははじめ武帝と阮籍とに婚姻關係を結ばせようとした。籍は六十日間酔いつばなしで沙汰止みとなった。……籍はまた、青眼と白眼をつかいわけ、くだらん男がくると白眼をむいてみせた。稽喜がやって来たとき、籍は白眼をしたので、喜は不快になって帰っていった。喜の弟の康はそれを聞いて酒と琴をもってやって来た。籍は大いに喜こび青眼を見せた。」とある。この種の「結婚拒否」は枕中記、南柯太守伝に見られる富貴に惑わされる欲望とはまったく異質である。とりわけ「青白眼」は失意の後の消極的な逃避ではなく「武力のおどしに屈せず、富貴の誘いにもならない」という積極的抵抗と不妥協であり、是非曲直のはっきりした強者の行為であり、黒白のけじめのない弱者の態度ではない。陶淵明は五斗米の為に腰を折らなかつたし、当時の各種の暗黒な政治支配者との妥協を拒絶した。彼は「夢が醒めて」後に気づいて、政治から遠ざかったわけではない。だから魏晉時代の自然主義者は、理想を大声で語るだけで自らは汗を流して実践しようとし、欠点はあったが、ここで表現されているような消極的な世を捨てた態度とはちがっていたのだ。たとえば白居易などはある種の唐代人の安心立命の態度を代表している。彼がこうした態度

をとつた原因は官僚社会での失敗である（第三章で詳説）口を閉して是非を論ぜず、すべてに満足し心を安んじ、他人をとやかく言わない、というこの態度は、前集十七巻の「贈内子」という詩

「年雖老猶少於韋長史、命雖薄猶勝於鄒長水、眼雖病猶明於徐郎中、家雖貧猶富於郭庶子」

（年はとつたが韋長史ほどではない。めぐりあわせはよくないが、鄒長水よりはいい。眼を病んではいるが徐郎中よりは見えなし、家も貧乏だが郭庶子のところよりはましだ）

また後集四巻の「狂言示諸侄」という詩

「世欺不識字、我忝功文章、世欺不得官、我忝居班秩……如我知足心、人中百無一」

（世人は私を字を識らぬとそしめるが、私は文学の功を挙げた、世人は私が官位を得ないとばかりにするが私はまあまああの位にいる。

……もし私の足るを知る心について言えばそれは百人に一人もっていないはずだ）

この種の自ら慰める式の比較の哲学はたしかに人生を遠視し、心を安んずる秘訣であろう。ただ阮籍の「青白眼」や陶潜の「五斗米の為に腰を折らない」などと比べてみると、この二つの人生観にはちがいがあることがわかる。白氏の哲学は、老荘をその源流とはしているが、かなり深い仏教思想の影響をうけている。彼は仏門に入ったことはなかったものの（老年期に在家で帰依した）彼の消極的で、人の世を「空」と見なす態度はこの傾向を説明する。老荘思想は唐代になって、極めて強く仏教の影響をうけ、前代の神仙方士の服薬錬丹に加えて、あきらかに唐代独特の道教の形態を形成していた。この期の道教は、理論上では老荘を信じていたが、荘子や道德經の現実に対する厳しい批評的論調とはまったくちがっている。もともと

との「自然」「無為」とは事物についての厳しい主張及び方法だったのだが、この時期になると、消極的現実逃避の態度とその口実に変質してしまった。したがって枕中記と南柯太守伝はともに人心を覚醒させるような一種の宗教くさきさがあるのである。このことは、当時のある部分の人々の現実に対する見方を反映すると同時に、仏道の二教のその時代における原形となる思想形態と、それが社会に与えた影響を説明しているのである。

第二節 枕中記と南柯太守伝に反映した時代と社会

枕中記と南柯太守伝の主題は似かよつたものであるとはいへ、そこに反映している時代背景は同じではない。大方のところを言えば前者は中唐の作品にちがいないし、後者は晩唐の作である。第一のちがいは、枕中記の盧生の娶る相手が清河の崔氏の娘であり、南柯太守伝の主人公は駙馬として招かれることである。前者は「子孫の結婚相手は、すべて天下の大貴族」であり、後者は「息子は親の威光で官位を得、娘は王族に嫁いだ」となる。この両者の間には大きな価値転換がある。その原因については第三章で詳説したが最も重要なのは、山東士族が政治的に力をつけてきて、人々が皇室と婚姻したいという願望をせだいに変えさせるようになり、しかも皇室の公主たちさえ、山東士族に嫁ぐのを名譽とするようになり、礼儀作法を尊重したが、士族の礼儀作法を標準とするようになったことである。たとえば憲宗朝以前の状況は、

「帝室の十の家の息子達は、朝廷外に家を持つことをしなかつたし、娘達は結婚の時期が不定であり、彼等の結婚は皆宦官に多くの金を支払ってどうにか解決していた。李吉甫は天子に奏上して言った。『昔から、公主の結婚相手には、必ず慎重に人選をし、江南の

名門から立派な人物を扱びとったものでした。最近はそのようになっていない。どうぞ天子は詔を下して、公主を県主に封じ、門閥で官位の高い者を配偶者とされるように」と(新唐書一四六李吉甫伝)というのであったが状況の変化以後はどうなったか、(新唐書一六六杜悰伝)では、次のようになっていた。

「岐陽公主は帝(憲宗)の愛娘だった。昔の制度では、婿としては皇帝の親戚か軍人が選ばれたものであった。帝ははじめに宰相の李吉甫に大臣の子を選べという詔を下した。しかし皆病氣を理由に断つたので、杜悰が選ばれるハメになった……。」

また文宗(晩唐の始)の頃の情勢はどうか、

「開成の初め文宗は真源・臨真の二公主を、士族に降嫁させようとし、宰相に言った。『民間では、婚姻を行うのに、官位品等を考えず、門閥を尊ぶという、我が家は二百年來の天子なのに、崔や盧の人氣には及ばない、ということか』宗正卿に門閥の子を任ずるよう詔を下した。」

これは憲宗朝からすでに二十年以上たった頃の様子で、士族が公主を尊ぶ氣風がまだ十分ではなく、多分に強迫的なところがあったことがわかる。当時の帝王は自分の娘に士族の礼法を学ばせ、彼等の要求する標準に達する為に大いに努力したのである。

「李惟岳の子の」元は、もともと輕薄な男だったが、長慶末年に薛渾とともに襄陽公主と私通していた。事が露見し、公主は禁中に幽閉され、元は嶺南に流された。」(新唐書二一一李宝臣傳附惟岳伝)。

「広徳公主(宣宗の娘)は于琮に降嫁した。琮ははじめ永福公主と結婚していたのだが、ある時永福公主が帝と食事中に怒ってさじと箸を折った。帝は「これが士族の妻のすることか」と言い、あら

ためて琮に広徳公主を妻とすることを許した。」

「万寿公主は鄭顥に降嫁したが、帝(宣宗)は彼女を可愛がっていたので、結婚に先だつて詔を下した『先王の制によれば、礼は貴も賤も共に行わねばならぬものだ、万寿公主は男や姑によくつかえ、士人の家法にしたがうべきである……』」(新唐書公主列伝)

宣宗朝は憲宗朝から五十年ほど経た時代であり、士族と皇室の結婚についての世間の風氣もだいぶ変わってきていて、一般の人々も駙馬となることを名譽と考えるようになった。だから枕中記の主人公は、清河の崔氏の娘を娶つて(崔は天下の第一姓であり、清河の崔氏は博陵の崔氏より一層高貴だと考えられていた)人生の夢想のはじめとしたのである。そして南柯伝は公主と結婚するのを最大の幸福と考えていたのであり、前者は中唐の風氣がまだはじまらないか、又ははじまったばかりの頃の作であり、後者は晩唐の宣宗朝時代又はその後の作である。さもなければ南柯記の主人公の婚姻の對象は皇帝の娘ではなく、士族崔氏盧氏の令嬢になるはずであろう。

更に小説に反映している時代の違いは、枕中記では夢の中で「出でては將軍、入りては宰相」へと進み、南柯伝では、郡主となり一地方を治めることになっているところである。前者は中唐以前の現象、後者は晩唐期の現象である。盛唐以前は府兵制が行われていたから、將軍は軍事専門ではなく、平和な時は宰相であり、戦争になると兵を率いて征伐に加わり、休戦になると大臣にもどることがよくあった。こういった状況は、玄宗朝になって漸次改められはじめた。玄宗時代には、吐蕃の侵入があり、辺疆で数十年も連続して軍事行動の必要があり、長期に亘つて兵を駐留させた。又府兵制が破壊され、募兵制に改められ、交替がなくなれば將軍は軍事専門となる。將軍となつて辺境へ行くとなると、かなり長期にそちらに居る

こととなり、宰相となる機会がすくなくなることは当然考えられる。しかし、玄宗の時代にこの種の制度が依然として盛んに行われた。牛仙客などは軍人の出身なのだが吐蕃を防ぐのに功績があり、一度は宰相にとりたてられ、天子の異常な寵愛をうけ、多くの人々の反対をひきおこした。安祿山は河朔を守って功があり、玄宗は彼を宰相にしたいと考えたが、人々の反対が多くて成功しなかった。玄宗は又「遥任」の制度を考え出して、將軍が宰相を兼ねられるようにした。(新唐書一〇一蕭瑀伝参照) こうして中唐の時代には、大いに軍功を建てた郭子儀等の人々が宰相となり、節度使を兼任した。こうして世間では、「出でては將、入りては相」となる人を文武兩道の完全な人格者、最も大きな光榮を得た人と見なすようになった。そして人々は、それを人生の仕事の頂点とするようになったのである。晩唐の時代になると藩鎮の割拠状況は具体的に一そうの強まりを見せ、人々の考え方もまた変化し、一つの地方を割拠し獨立自尊を守ることを偉業と考えるようになった。宰相などになるのは弱く無力な士族であり、宦官と藩鎮が結托しているなかで、その鼻息を伺わねばならず、もはや齒牙にもかけられない存在になっていた。したがって枕中記はきつと「出でて將、入りては相」という制度がまだ完全に潰滅していない時期の作にちがいないし、南柯伝は晩唐の藩鎮の極端な跋扈の時期の作であろう。

第三に問題となるのは、南柯伝は形式・技巧上、枕中記に比べて、複雑で委曲をつくして筋立ても念入りにつくられていることである。単にエピソードが多いだけでなく、「蟻の国」を設定し、政治の世界で、他人に取り入って利を得ようとする俗人どもを「蟻の聚り」と罵っている。つまり前者はただ個人の人生哲学と感慨を述べたものなのだが、後者はただ人生を見透すだけでなく、それ

を辛辣に風刺した作品である。南柯伝の作者は作品の末尾の結語で言っている。

「勿論、神怪な出来事を取りあげ、それについて語ることは、礼教の戒めにもとるのではあるが、世の中で官位を盗みとり、ほしいままに生を食らうとする連中にとつては、この話が一つの教訓になつて欲しいと願つて書いたのである。後世の人々よ、どうかこの世の功名や富貴は南柯の夢のごとく偶然なのだということを悟り、名声や地位があるからといってこの天下で大きな顔をしないうちに、この言葉から見れば、作者が特に考えるところがあり、南柯での瞬間的な豪勢な生活を特にとりあげ、ある種の人々にむかつて「名声や地位があるからといって、この天下で大きな顔をしないうちに」と警告を発していることは明らかである。のちに作者の生涯を考えると、作者の南柯太守伝を書いた本意を見出すことができるだろう。

この二篇以外に、唐の任蕃作とされる夢遊録に桜桃青衣という作品がある。(太平広記二八一、及唐人説書一一) 物語の大意はこの二篇とほぼ同じなので、ここで引用してみる。

「天竺の初ごろ、范陽の盧君は都で科擧の試験を受けたが、なかなか通らず、生活は苦しくなってきた。ある日驢馬に乗って歩きまわっていると、とあるお寺で坊さんが説教会を開いていて、お客がたくさん集まっている。盧も入っていつて座席についたが、眠くなつて寝てしまい、夢の中でお寺についた、一人の下男がいた……下男は、「奥様は盧という姓で崔家に嫁ぎ、今嬪ひんになって町におられます」と言う。そこで親族関係をしらべてみると、盧の父方のまたいところであった。……盧はそこでついてゆくと、……一軒の高い大きな門のある家へついた。……しばらくして四人の人がでてきて盧と

会った。皆その息子で、一人は戸部郎中、一人は前の鄭州司馬、一人は河南の功曹、一人は太常博士であった。彼等は盧を連れて、座敷へ招き入れ、母親と対面させた。彼女は実にくわしく親戚の噂を知っていて盧に「結婚はまだか？」とたずねた。盧が「まだだ」と言うと、彼女は「自分には母方の姪がいて鄭の一族だが、お前にとりもってやろう。……結婚のお金や、宴席の準備は心配しないで全部私に委せなさい。」と云い、……その晩に式を挙げた。その豪華さは、世間の常識を破るほどであった。……秋になって試験の時期がくると、彼女は「私は礼部侍郎と親しいから、きつと力になってくれる、心配しないで」と言う。次の春には見事に合格した。そこで又、博學宏詞科を受けることにすると、彼女は「吏部侍郎は当家とは官職に近い……彼にたのんで必ずお前を高位で合格させてやろう」と言った。合格発表では甲科に合格しており、秘書郎の役を授かった。彼女は又「河南の尹は私の母方だから彼にお前を都の近くの県尉にしておらおう」と言った。数ヶ月して盧は監察御史となり殿中に転任し、吏部員外郎判南曹を拝命した。銓衡がおわると郎中に任ぜられたが、以前の官職はそのままだった。知制誥となり、数ヶ月して礼部侍郎に遷り、二年間、科挙を執行し……黄門侍郎平章事（宰相）を拝命し……五年間在位し……左僕射となって宰相職をひき、数ヶ月して東都留守河南尹兼御士大夫となった。縁組みをしてから二十年を経て、七男三女を儲け、それぞれに官位につき、また嫁いで、孫の数はしめて十人となった。のち外出したついでに昔桜桃をもった下男のいた寺の門の傍へ出た。のぞいてみると説教の席ができていた、そこで馬を下り……前宰相ということで尊重され、先導・後続の家来が多勢いて……殿上にのぼり仏を拝していると、フイと眠気がさして、永いこと起きなかつた。と耳もとで、坊主が

「旦那さんはどうしていつまでも起きないの？」と言う声が聞こえた。目を醒ますと、わが身は白衫を着、服装はもとのままの粗末なもので、供の者など一人もいなかった。わけがわからなくなり、門を出てみると、下男が、驢馬の轡をとらえ、帽子を捧げて待っていた……盧はがっかりして言った。「人の世の榮華、運と不運、富貴と貧賤はなるべくしてなるもの、今よりのちはもはや榮達を望むまい」以後は、道教を信奉し、仙界を求め、俗世と隔ってしまった。」この物語は時代と社会背景を四つの点でくつきりと反映している。

(一) 寺院での説教会(講筵)これは俗講である。俗講が、いつ頃から始まったかははっきりとはわからないが、最も流行したのは晩唐時代である。孫榮の北里志序に『南街の保唐寺で俗講の席が毎月八のつく日に開かれることが多かった。人々はお互いさそいあつて聞きに出かけた。だから保唐寺は八のつく日になると若い男が多くなったのは、おおかた妓女と会う約束をしていたからであろう。』とある。ここから、毎月八のつく日に定期的に俗講が開かれ、その聴衆には社会の各界層の人々が集まっていた、いま引用した「桜桃青衣」とびつたり符合する。この貧乏受験生は、俗講の席上で夢を見るわけで、これは、当時俗講が盛んだったことを示すだけでなく、その講釈の内容まである程度推測できるのである。

(二) この盧生の夢の中に、枕中記と全く異なるところがある。それは政治の情勢である。枕中記の盧生は一歩づつ出世街道を登つていったので問題なかったのだが、この盧生はそうでない、彼の夢の中に一人の金持ちで権勢のある姑母が出てくる。朝廷にいるのは、彼女の親戚でなければ知りあいであり、合格も任官も一つ一つすべて彼女のコネでできるわけである。このことと孫榮の北里志の

序で言っている「昔から進士は大いに勢力のあるものであり、他に比類のないほどだったが、彼等の多くは貴族の子弟であり、平民出身は二三人にすぎなかった……」ことと符合するのである。北里志は宣宗の大中年間の事情を書いたものであり、この時代は政治が極端に乱れていて、制度は殆んど破滅に瀕していたので、政界に知り合いのいない者は、出世することが大そう困難だったのである。国家有為の人材を集めようとする進士科ですら、少数の特権階級の人々に牛耳られていたのだから、他は推して知るべし、という有様だったのである。

第三節 枕中記、南柯太守伝の作者

枕中記は沈既済作とされている。代宗の大歴年間に、吏部侍郎の楊炎は沈既済に史才があるとして、史館修撰に推薦した。史才とは小説を書く際の必要条件の一つであつて、彼がもし枕中記の作者であつても、基本的に何の不思議もないのである。又枕中記は形式、技巧及び内容から考へて、たぶん貞元年間の作であり、鴛鴦伝と時間的にさほどへだたつてはいない。沈既済は貞元十年に死んでおり、時間的にも不都合はない、又沈既済の伝記からは、彼が消極的隠世的な道教思想の持ち主であつたかどうかを見きわめることはできないが、彼の息子の沈伝師の伝記（新唐書一三二）にその痕跡を見ることが出来る。

「沈伝師は字は子言といひ……「春秋」に通じていて……貞元の末に進士に挙げられ……右拾遺左補闕史館修撰に任ぜられ……翰林院承旨に欠員ができ、彼がその候補者に選ばれ穆宗が直接に會つて任命しようとした。すると彼は辞退して言つた。「学士院長は天子の密議に参加し、宰相に次ぐ重職です。私はとてもできないことを

知っておりませう。私は地方で政治を行つて陛下のためにつくじたいのです」そして病氣を理由に都から出てしまつた。天子は中使を派遣して、ねんごろによびもどそうとし、李徳裕が彼と懇意だつたので、彼を諄々と論じてもらつたが、結局出てこなかつた。そこで本官に史官を兼職することとなつた。……或る時家令の尹倫という男を雇つたが、愚かで仕事が行く、皆が他の人間と交えようと言つた時、伝師は「私は都へ行く時に彼にこう注意した。『手を抜いてもいいからあちこちに手を出すなよ』倫はあれで十分さ」

沈伝師は李徳裕と親しかつたので、党争にかかわつていた疑いがある。穆宗の時代は牛李の党争が激烈で、双方で人材の引き抜きあいをしていた。「承旨」の役職に欠員が出た時、彼が病氣を理由に昇任を承知しなかつたことから、彼が極端なまでに「安心立命」の境地を求めていたことがわかるし、また、「手抜きしていいから、手出しすぎるな」という考え方は枕中記の表現している思想とかなり近い。勿論これだけで彼の父親が枕中記の作者である証拠とするには足りないけれども、彼の思想や主張が、彼の家庭でうけた教育と多少ともかかわつていゝと言へるのである。

また枕中記と南柯太守伝を書いた人は、自分の人生街道の途上で、酸いも甘いも噛みわけたことのある人物のようである。ことに、彼等の執筆は、きつと、ある種の失意のうちに人生の捉え難さを悟り、一切を夢幻と観じて虚名や虚利に迷わない境地に達した時になされたにちがいないのである、沈既済の官職は楊炎の推薦によるものであつた。この楊炎という男は中国史上稀有の経済専門家であつて千年以上もつづいた兩税法の創始者として著名である。彼は代宗朝の時宰相となり、一時権勢を誇つたが、あまりにも創造的でありすぎて、人にうけ容れられず徳宗の建中二年に殺された。沈既済も

その時、処州の司戸参軍に左遷された。彼はのちに復起して、官界に入り、礼部員外郎にかえり咲いたが、この時にうけたショックと恩人楊炎の悲運は、彼にはいやというほどのきびしい体験であったにちがいない。

一説によると、枕中記は李泌の作とされる。李泌の生涯をその息子李繁の書いた鄴侯家伝によってしらべてみると、この伝記は内容的には大いに誇張されているが、大中年間の作であり、枕中記の作者はそれを見ることはなかったはずだ。李泌は四つの王朝につかえた（玄宗から徳宗まで）三度隠退し、名山を遊歴している。最後の職は徳宗朝の時で、宰相となり鄴侯に封ぜられた得意の絶頂にあり、死んで太子太傅を追贈されている。彼の一生の事蹟は、いささか枕中記の主人公と似ているところもあるし、彼が死後に仙人になつたという伝説さえある（太平広記三八に鄴侯列伝より引用）から、枕中記を彼の作品とする伝説も、そのあたりから出ているのである。しかし李泌は死んだのは、一生のうちで得意の絶頂にあつた時（貞元五年）であり、その頃に枕中記を書けたかどうかは疑問なのである。それに、私は、枕中記という作品は、貞元時代よりも早く書かれてはいないだろうと考えている。李泌の事蹟と枕中記が似ているからといって、ただちに彼の作とするのはおかしい。作品に反映している時代の典型的な生活場面がちがうからである。

南柯太守伝の作者李公佐は、代宗の時代に生れ、宣宗の大中年間に死んでいる。八十歳もの長寿を保つた人である。彼は元和年間に江西の従事となり、後罷免されて長安に帰り会昌の初年に楊府の録事となった。彼の一生は、政治的には不遇で、大中二年に、事件に連坐して、兼任の官もともに罷免された。その時は牛党の人々が新たに権勢を得たばかりで、李党の人々を政界から除いたばかりであ

り、官界は徹底して人事のいれかえをやっていた。白敏中が宰相となり、その威勢は一世を風靡した。作者はあとに結論を言っている。「世の中で官位を盗み、ほしいままに生を貪ろうとする者にとつてこの話が一つの教訓となつてほしい。後世の人々よ、どうかこの世での功命や富貴が南柯の夢の如くに偶然なのだということを悟り、名声や地位を誇つてこの天下で得意ぶらないでほしい」と。又、讀では「この世に比べるものもない高位を得、国都をも動かす権勢を誇らうとも、悟達の人の目から見れば、蟻の社会の営みと何のかわりがあるうか」と言う。これらの言葉の中にわれわれは、作者の当時の為政者への糾弾の意向が秘められていることを見出すことができる。この作品は作者が官位を取り上げられたのちに作られた（大中年間）にちがいないことを示し、第二節で述べた時代・社会背景ともびつたりと合致するのである。物語りの中で「貞元十八年秋に書いた」とするのは、実は一種のカモフラージュであり、当時の権力者に見つかつて断罪されるのを防ぐためだったのである。彼は永い一生の経歴のうちでいやになるほど人生の様々な不遇を嘗めてきて、それを南柯伝に書いたのである。ただ単に形式や技巧において枕中記より抜きん出ているだけではなく、そこに「蟻の窟」を仮設し、成り上りの高官どもを「蟻の集まり」と罵り、当時の政治社会を徹底して諷刺するという点においても、はるかにすぐれているのである。

南柯太守伝の作者李公佐は、会昌年間に楊府の録事参軍の時（李党の治政時代）に呉湘の裁判事件（第五章）にかかわりをもつた。大中年間に牛党が勢力を得て、呉氏の家人に無実を申し立てさせ、それによつてクレーターをおこし、李党の要人及びその裁判の關係者はすべて処分された。李党の領袖李徳裕が崖州司戸参軍に貶され

た以外に、劍南西川節度使光祿大夫吏部尚書同平章事成都尹上杭國
隴西郡開國公食邑二千戸の李回は責任をとらされて湖南觀察使とな
った。杭州刺史桂管防禦使の鄭亞は循州の長史に左遷され、前の准
南觀察判官魏劔（その事件の裁判官だった）吉州の司戸に貶され
た。李公佐は正義を守れず、権力あるものに追隨した罪で、張弘思
とともに、兼任の官までもすべてけずる旨の判決をうけた。思うに
李公佐は官位が低く、党派関係ではなく、公務上でその裁判事件に
かわかり、それが左遷の原因だったのであろう。

註

- (1) 駙馬とは皇帝や王の娘婿にあたえられる官職名である。
- (2) 宗正は官名、皇族に関することを掌る。皇族の者が任ぜられてきたが、ここで皇族以外の者にもその職が与えられるようになったのである。
- (3) 甲科とは、科擧試験の種別の一つ、唐代では進士科に甲乙、明経科に甲乙丙丁の別があった。甲科は試験の難しい科目である。
- (4) 知制誥は官名、翰林学士が学士院に入って一年たつて就く。天子の詔諫や内命のことを掌る。
- (5) 承旨、官名、翰林院に属する。唐の憲宗の時におかれた。翰林学士の中で、年令が高く、学識ある者を充てた。文書の選定、経籍の整理などの業務を行った。